

任意課外活動への参加が外国語学習の認知に与える影響 —多読支援による大学生の効力感と情動変化—

森 恵子 (早稲田大学)

キーワード: 自己効力感, 情動知能, 外国語学習

問題と目的

Sampson (2016) は日本の英語学習者の特徴として、個人の認知・情動と教室環境の影響を受け、動機づけが弱まる demotivated 状態を経験しており、その背景には個人の日常生活と学習が関連しないゆえの興味・意欲喪失があると述べた。

この意欲喪失状態が継続する学生への支援に関して、清田 (2010) はリメディアル教育の場面において、対象者の否定的感情と自尊感情の低さを取り扱う必要があると述べた。また森 (2019) は外国語学習者について、自己効力感向上が主体的学修態度に寄与すること、一方非主体的で学習課題等の実行を先延ばす場合、主要因の一つは事態の楽観視であること、また自己情動の理解は先延ばしと負の関連があることを示した。

以上の知見に基づき、個人で自己調整的に英語学習に取り組むことが困難な大学生への支援策として、課外活動グループを立ち上げ、参加者が励まし合いながらインフォーマルに英語を学ぶ場を設け、その効果を検証することにした。なお当該英語クラスに所属する、多読(平易な英語の本等を読み続ける学習法)に困難を覚える学生の存在を念頭に置き、活動内容は多読を中心にした。

方 法

調査対象者

関東のA大学で必修の英語クラスを受講している39名の学部生に、20XX年1月と同年2月、当該クラスの授業時に質問紙調査を行った。二回の調査とも回答に欠けがなかった33名(男性20名、女性13名)のデータを分析した。

第一回調査と第二回調査の間に、週一回1時間、計4回の「多読クラブ」(課外で英語多読やゲームを行う)活動を開始することを告知した。参加意思を表明した12名が教員と共に約1か月間活動を行った。また参加者のうち7名は同教員による半構造化インタビューに参加した。

調査質問紙

外国語学習の文脈における認知と感情について尋ねるため、教示文を「大学で英語(外国語)科目履修中のあなたを思い浮かべて、お答えください」とした。使用した尺度は野崎・子安(2015)の情動コンピテンスプロフィール日本語短縮版(例「落ち込んでいる時、自分の気持ちとその気持ちを生

じさせた状況とを結びつけることは簡単だ」)、坂田・福田・ポーブ(2013)の自己評価表を改変した自己効力感質問項目(例「立てた学習計画に沿って学習ができる」)、小浜(2010)の先延ばし意識特性尺度の下位尺度である事態の楽観視(例「時間がまだあると思うと、課題に身が入らない」)であり、5件法(1「当てはまらない」—5「当てはまる」)で回答を求めた。インタビューは個人およびグループで行い、各自の多読実践を振り返っての感想を尋ねた。以上のすべての調査は当該大学研究倫理委員会に承認を得た計画に基づき、書面と口頭で説明を行い、同意書への署名を得て実施した。

結果と考察

クラブ参加の結果英語学習への認知と情動の平均得点に違いが見られるかを検証するため、対応のあるt検定を行った。非参加者(N=21)については第一回と第二回の平均値に有意差がなかったが、参加者(N=12)については効力感($t(11)=2.29$, $p<.05$)、情動知能($t(11)=3.70$, $p<.01$)とも有意差が見られた。よってクラブ参加者は、二回目の調査時に効力感と情動知能を有意に高く感じていたことが明らかになった。

インタビューの回答を書き起こしカテゴリーを生成したところ、対象者は(1)多読の効果に疑問を抱き、否定的な認知・感情を持ち、多読記録提出の締切り直前に「作業」として機械的にこなしてきたが、(2)教師や先輩など重要な他者の言葉により、多読への評価を肯定的に変化させたことがあり、(3)グループ多読活動や学習のコツの知識獲得を通し、肯定的な感情が生まれ、多読への意欲向上が意識されたことが明らかになった。

以上、本調査の対象者に限定された効果ではあるが、自律的な英語学習(主に多読)が困難な学生が、課外活動という足場掛けを利用して継続的な学習に取り組み、感情・思考を言語化し行動を共有した結果、「やればできる」という効力感を高める結果となった。

ただし介入前の参加者と非参加者の属性が均一かどうか検証されておらず、介入後学習行動の変化が見られたかどうかの調査もなかったことなど、課題も多く残された。今後は異なる学生を対象とした介入の長期的な効果を検証する必要がある。